

活気ある「多文化共生社会」をめざす！

日本語教育の視点から

嶋田 和子 (17期) 一般社団法人 アクラス日本語教育研究所
代表理事



皆さまは、「多文化共生」という言葉から、どんなことをイメージされるでしょうか。ここでは、「日本人も外国人も、さまざまな人々がいきいきと暮らせる社会」とし、日本語教育の視点から話を進めていきます。今、日本社会には約283万人の外国人（2019年9月末現在）が暮らしていますが、そこでは共通言語として日本語が大切な役割を果たします。一方で、日本語は、多くの人にとっては母語であり、空気のような存在です。それを改めて客観的に見つめ直すことは、自分自身のコミュニケーション力の向上につながります。

では、なぜ多文化共生が活気ある社会づくりにつながるのでしょうか。それは、異なる文化・価値観を理解し、認め合うことが社会に多様性を生み、エネルギーを生み出すからなのです。このことは、日本人同士にも存在する「文化・価値観の多様性」への気付きにもつながります。

日本語教育を取り巻く環境の変化

日本は、少子高齢化による深刻な人手不足という社会的課題に向き合うべく、外国人の受け入れに力を入れ始めました。こうした流れの中で、日本語教育の多様性はさらに広がり、留学生、ビジネスパーソン、生活者としての外国人、子ども、技能実習生……と、ますます多岐にわたるものになってきています。

しかし、社会において重要な役割を担う日本語教育には、これまで拠って立つ法律がありませんでした。やっと2019年6月に、超党派による議員連盟によって進められてきた「日本語教育の推進に関する法律」が可決、成立しました。この法律は理念法であり、これから中身を作り込んでいきますが、目的は「多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現」であると、明確に謳っています。

このように法律ができ、新たな第一歩を踏み出したことから、2019年は「日本語教育元年」とも言われています。

日本語を教えるということ

では、日本語を教えることについて考えていきます。私がこの道に入ったのは、30年以上前になりますが、当時「何で、日本語教師に？ 日本語なんて誰でも教えられるでしょう」と、よく言われたものです。しかし、無意識に使っている母語を、客観的に見つめ直し、外国人に教えることは、簡単にできるものではありません。

「コップに水が入っている／入れてある」はどう違うのでしょうか。Giveはあげる、Receiveはもらうですが、「友達が私に本をあげた」ではなく「くれた」になるのはなぜでしょうか。

「お風呂に入って、ビールを飲む」という場合、ビールを飲むのは、どこでしょうか。お風呂を出てから居間で飲むと考えるのが一般的ですが、「お風呂に入って、そこで」とも解釈することができます。それは、「～て」にはさまざまな機能があるからなのです。

このように、日本語を捉え直すことによって、日本人の物の考え方・文化が浮き彫りになってきます。また、学習者の母語との比較によっても、さまざまな気付きが生まれます。敬語を例にあげてみましょう。韓国語にも敬語は存在しますが、日本語では同じ相手でも状況・関係性によって尊敬語になったり、謙譲語になったりする、つまり日本語は相対敬語、韓国語は絶対敬語という大きな違いが存在します。秘書は田中社長について、社内では「社長は出かけていらっしやいます」、お客様に対しては、「社長は出かけております」という使い分けが、日本語では求められるのです。

日本語教育の現場から

日本語教育は実に多様ですが、ここでは介護の日本語教育と、子どもの日本語教育を取り上げます。

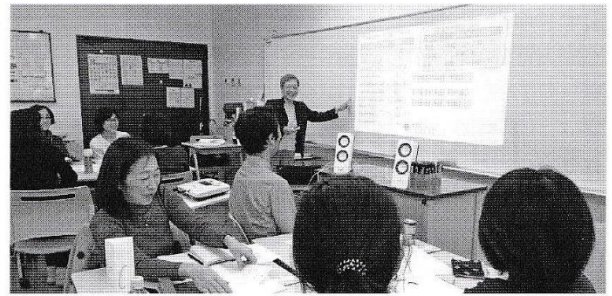
介護人材は2035年には約80万人不足すると言われ（2018年経産省発表）、外国人の受け入れが加速化してきましたが、そこで大切なのが日本語教育です。実は、介護では3つの言葉を覚えなければなりません。例えば、一般的な言葉として「うがい」がありますが、国家試験では「含嗽^{がんそう}」、現場では時によって「ガラガラッペ」という言葉が必要になります。

さらに、方言を理解することも求められます。「ゴミを捨てる」は北海道では「ゴミを投げる」、「具合が悪い」は高知では「のうが悪い」と表現します。このように介護従事者はさまざまな言葉を学ばなければならないのです。介護とは「その人の人生のラストステージに寄り添うこと」であり、人と人をつなぐ言葉はとても大切になってきます。現場での日本語によるコミュニケーションに加え、国家試験のための準備もあり、介護の日本語教育とは、とても奥深いものと言えます。

外国にルーツのある子ども達の日本語も大きな課題の一つとなっています。2019年9月に発表された文科省の調査では、約2万人の不就学児がいることがわかりました。日本語がわからないという理由で、外国にルーツのある子ども達が学校に通うことを諦め、人生の選択肢を狭めることがあってはなりません。そのためには、生活言語に比べ、習得に時間を要する学習言語に注意を払うことが求められます。また、日本語の習得に加え、母語・継承語教育にも配慮することが大切です。将来のある子どもに関する課題解決は「待ったなし」なのです。

「選ばれる国」日本になるために

今後、大勢の外国人との共生の加速化が予測される中で、果たして日本が「選ばれる国・魅力ある国」であるかという問いも忘れてはなりません。外国の人々が「日本に来て、新たな人生が拓けた」という声がアチコチから聞こえてくる社会、そして、「こころ・ことば・制度の壁」をできるだけ低くした社会づくりが望まれます。「誰もがいきいきと自分らしく、ありのままの自分で生きるこ



日本語教師のためのワークショップで

とができる社会」、それが多文化共生社会ではないでしょうか。

・スイスの作家マックス・ブリッシュが半世紀も前に語った「我々は労働力を呼んだ。だが、やってきたのは人間だった」という言葉の重さに目を向けることが大切です。外国人を受け入れるに当たっては、単なる労働力としてではなく、大切な「ともに社会をつくる仲間」として考えることが求められます。すべての人が「多文化共生社会づくりの担い手」として、「参集・参加」に留まらず、「参画」できる道を切り拓いていきたいものです。

日本語教師という仕事の魅力

日本語教師の魅力とは何でしょうか。それは日々、異文化コミュニケーションの海の中で仕事ができることと言えます。日本語に関する質問に加え、「なぜ自動販売機がこんなに多いのか?」「〈足元注意〉〈猫飛び出し注意〉、日本ではなぜこんな注意までするのか」といった質問が飛んできます。日本語教師とは、毎日新たな発見があり、多くの学びがある仕事です。

2018年の調査では、国内では26万人（文化庁）、海外では384万人（国際交流基金）の日本語学習者がいますが、国内外を問わず日本語教師不足が大きな課題となっています。こうした状況下、長年教師教育を専門としてやってきた私は、講演会、研修会、ワークショップなど、ますます仕事が増え、今も国内外を駆け巡っています。日本語教師という仕事は、何歳からでも始めることができ、それまでやってきたことが全て生きる仕事です。皆さまも、「教えることの何倍も学ぶことができる」日本語教師を目指してみませんか。まずは、日本語教育機関のドアを叩いてみてください。

「百聞は一見にしかず。

されど、百見は一験にしかず。」